

国土交通省、経済産業省、総務省、内閣府など
6府省は、昭和48年から毎年10月を「情報化月間」と定め、情報化に関する普及・啓発を重点的に展開している（3面参照）。「広報とらつく」では、情報化月間にちなみ「物流彼方此方（あちこち）特別編」として、情報通信技術（ICT）を活用して配車業務効率化に取り組む、京都府のフジモト運輸株式会社を紹介する。

情報化月間

京都府久世郡久御山町に本社を構えるフジモト運輸株式会社（小野光治社長）は、「冷凍・超冷凍・冷藏・定期・チルド」の異温度帯の食料品輸送業務と、保管・仕分けを含めた一括・一貫請負業務を核として、同時にコンビニエンスストア配送業務も行っている。配

送工リアは、京都府、滋賀県、大阪府、奈良県など近畿地方を中心としたながらも、協力会社との提携により東海、関東、北陸、中国、四国、九州地方へと物流ネットワークを構築している。

同社は、主力の地域密着型の異温湿度帯小口多頻度配送で、20年以上にわたって培ってきたノウハウを専門化させ、情報通信技術（ICT）を活用してシステム化し、日々刻々と変化する顧客の業量や品目等に的確に対応しつつ、業務効率化を進めている。

①冷凍庫内を2重に仕切り

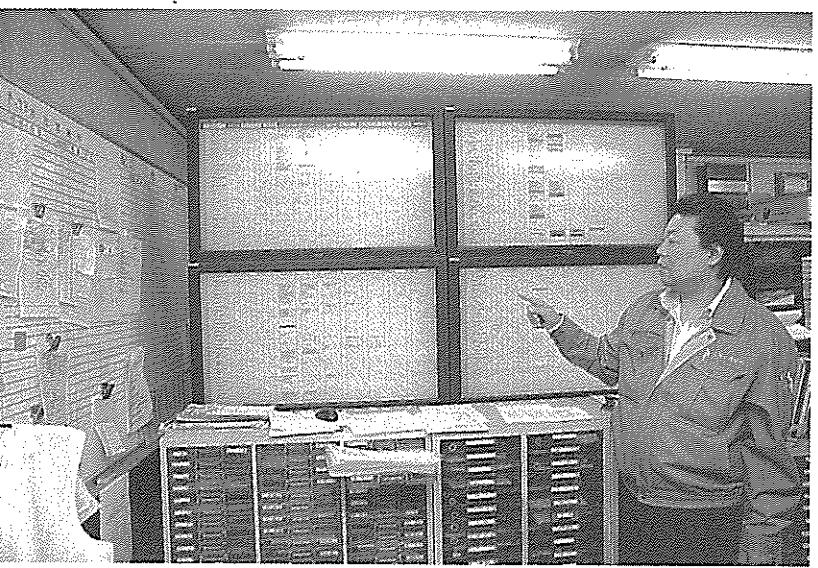
フジモト運輸は、昭和48年に創立。以来、京都、滋賀など地元密着で食料品輸送事業を展開してきた。2代目となる小野社長が、相応の荷物量がある京都市内に向けた小口配達は採算が合わない方向けの小口配達は採算が合わない。

当初はチャーターの輸送が主だったが、バブル経済のシテムの基礎を作り上げた。

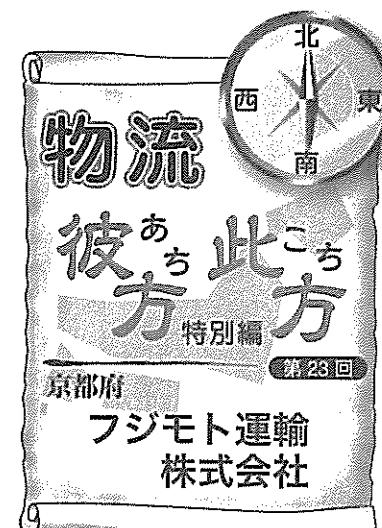
フジモト運輸の主力となる異温湿度帯共同配送の2層式の冷凍車



フジモト運輸の主力となる異温湿度帯共同配送の2層式の冷凍車



液晶ディスプレイに表示された配車割を説明する村田部長。左はこれまで使用していたホワイトボード



小口の異温湿度帯輸配送に特化

保管・仕分け含め一括請負業務展開

ースに乗りにくいため、その解決策として、およそ20年前に異温湿度帯商品の同時共同配送に取り組み、現在

率よく輸配送するために冷凍車の庫内を2層式にし、可動式の中仕切りを設けて庫内の大きさと温度を自在に変えられるように工夫。

同時に同社独自の配達ルートを確立したこと、「ロードコスト」で「高品質」の日配輸送という、今まで続く同社の輸送形態を作り上げた。

現在では、自社車両65台を保有し、グループ会社1社25台、協力会社5社20台のおよそ110台により、365日24時間体制で「異温湿度帯共同配送システム」を稼働させている。

「弊社の一番の強みは他のトラック運送事業者が敬遠しがちな異温湿度帯対応と、小口多品種貨物に特化していることにあると思います。また、1台のトラックで5温湿度の商品を組み合わせて積載し、小口荷物の共同配送を主力に事業を拡大させている点です。冷凍は「冷凍車」、冷蔵は「冷蔵車」と複数のトラックを走らせているのではなく、可能な限り異温湿度帯を1台のトラックで対応しているのが特徴です。また、小口の荷物を弊社の

システムの基礎を作り上げた。

同社が提供するサービスは、年々小口多頻度化し、さらに徹底した温度管理を

求めた顧客ニーズにピタリと適合した。また、地球温暖化で問題となっている二

酸化炭素の排出を無駄に増やすことがないなど、環境面からのメリットもコスト減と相まって「一挙両得」と顧客に喜ばれた。

同社が提供するサービスは、年々小口多頻度化し、さらに徹底した温度管理を

求めた顧客ニーズにピタリと適合した。また、地球温

暖化で問題となっている二

酸化炭素の排出を無駄に増やすことがないなど、環境面からのメリットもコスト減と相まって「一挙両得」と顧客に喜ばれた。